カナダ移民政策の歴史（上）
—移民政策策定のプロセスとメカニズム—

村井忠政

はじめに

カナダはよく言われるように移民によって創られた多民族からなるモザイク国家であり、多文化主義と二言語主義を国の政策として掲げている。したがって移民の歴史はカナダ史の叙述の中でも重要な部分を占める。しかしながらカナダにおける本格的な移民政策に関する先行研究は意外に少ないことに驚かされる。当然のことながら、わが国においてもカナダの移民政策に関する研究論文の数もきわめて限られている。本稿の目的は、1867年のコンフェデレーション（カナダ連邦結成）から現在に至るまでのカナダの移民法と移民政策の変遷の歴史を辿り、移民法や移民政策の策定のプロセスでどのような力が作用したか、そのメカニズムを明らかにするところにある。説明の便宜上、本稿においては、カナダの移民政策の歴史を次の9つの時期に区分することにしたい。

Ⅰ　第二次世界大戦前の移民政策

① コンフェデレーション以前（1497年—1867年）

② 自由渡航時代（1867年—1896年）

③ シフトン時代とカナダ西部開拓（1896年—1914年）

④ 第一次世界大戦と復興期（1914年—1929年）

⑤ 大恐慌期（1930年—1937年）

⑥ 景気回復期と第二次世界大戦（1938年—1945年）

Ⅱ　第二次世界大戦後の移民政策

⑦ 第二次世界大戦後の好況期（1946年—1962年）

⑧ ポイント・システム導入期（1963年—1967年）

⑨ 現在（1977年—現在）

以下、順次これらの時期の移民政策についてそれぞれの特徴を概観する。なお、本稿においては第二次世界大戦前の移民政策についてとりあげ、第二次世界大戦後の移民政策については次号にまわすことにする。

I　第二次大戦前の移民政策

①　コンフェデレーション以前（1497-1867年）

第1期「コンフェデレーション以前」は最初のヨーロッパ人がカナダに到着した1497年から1867年のコンフェデレーション（カナダ連邦結成）の年までの約400年である。この時期はさらに次の3つの時期に小区分される。

1．ヨーロッパ人の定住から「征服」まで（1497年―1760年）

1497年にイタリア人ジョン・カボットがイギリス国王ヘンリー7世に派遣されてイギリス海軍の艦隊を率いて大西洋を横断、ニューファンドランド沖の浅瀬グランド・バンクスで大量の鱈の群を発見した。この新しい漁場のニュースが広がるとヨーロッパの大西洋岸の漁民たちは毎夏ニューファンドランドの海岸と浅瀬にバンカーと呼ばれる漁船で押し寄せ始めた。彼らはイギリス、スペイン、ポルトガル、フランスなどから鱈を求めてニューファンドランド周辺の海にやってきた。

しかしながらヨーロッパ人の本格的な入植が始まるのは、1608年にフランス人探検家シャンプレーンがセントローレンス川をさかのぼり現在のケベック・シティに砦（シタデル）を築き、ビーバーの毛皮交易の基地としたことでヌーベル・フランス植民地の基礎が確立されてからである。ヌーベル・フランスの歴史は1608年から1760年までおよそ150年続くが、この間にヨーロッパからケベックに来た移民は1万人を越えることはなかった。このように移民による人口の増加はかんばしくなかったものの、出生率の高さのせいでヌーベル・フランスの人口はその後着実に増えていく。1663年にわずか3,000人だった人口は、1712年には20,000人へ、そして1760年には70,000人へと増加を遂げた。[1]

2．王党派の到来から1812年戦争まで（1783年―1812年）

1775年アメリカ十三植民地がイギリスからの独立を図り戦争が始まると、50を越える王党派アメリカ人の部隊がイギリスに組して戦い、戦争の終わる頃には少なくとも10万人の王党派が合衆国での生活に耐え難く、移住しようとしていた。これら王党派の移住者のうち3分の1はイギリスへ戻り、他のものは西インド諸島やスペイン領フロリダへ向かった。しかし彼らのうち4万～5万人が、1783年にケベックやノヴァスコシアなど北方へ向かった。

革命時代のノヴァスコシア植民地の人口は約17,000人にすぎなかったが、およそ15,000人の王党派の到来によって約2倍に増えた。また15,000人の王党派がハリファックスから遠く離れたファンディ湾の北岸にあるセント・ジョン・ヴァレーに定住したので、この地域はノヴァスコシアから区別され、1784年ニューブランズウィック植民地として新たに発足した。このほかプリンス・エドワード島には750人、ケープ・ブレトンには1,000人が定住した。ケベックへの王党派の

移動は、ノヴァスコシアへ移動したものよりも少なく、およそ1万人にすぎなかった。[2]

3．ヨーロッパから英領北アメリカへの「民族大移動」（1815年―1867年）

1812年戦争―1812年、アメリカ軍がカナダに2度目の侵攻を試みたが失敗した―に伴い、英領北アメリカへの人々の移動の時代が終了することになった。ヌーベル・フランスの陥落以来、カナダへの移民の主流はアメリカの十三植民地からのものであり、この時期の英語系移民の多くは、熱心な王党派（ロイヤリスト）であろうと無関心な共和主義者であろうと、大陸に因縁深い北アメリカ人であった。しかしいまや陸路によるアメリカ人の移住はほとんど終わり、大西洋を渡ってイギリスから来る人々の流れにとって替わられた。彼らは人口を非常に増加させることで、英領北アメリカの発展を促進しただけでなく、その社会に新しい要素を加え、カナダをアメリカから区別するのに一層多くの貢献をした。

アメリカ人の定住の流れは1815年以降、さまざまな理由から次第に鎮まっていった。沿岸地方ではもちろんアメリカ人の移住は王党派の到来をもってすっかり終わってしまっており、ニューファンドランドにはついに及ばなかった。また王党派であろうとなかろうと、フランス語系のロワー・カナダ（現ケベック州）に、アメリカ人の移住が多いということもなかった。しかしアメリカ合衆国から大量の定住者を受け入れたアッパー・カナダ（現オンタリオ州）では、1812年戦争後の反アメリカ合衆国感情と、住みついてから7年を経過しなくてはアメリカ人が土地を獲得することができないという新しい法の制定によって、移住に水が差された。しかしそれよりも影響のあったのは、アメリカ合衆国のフロンティアにおける西漸運動が、いまやアッパー・カナダを通過してしまったということであった。アメリカ合衆国の開拓者たちはアメリカ合衆国の中西部の開放で、征服する広い活躍舞台を見出したのである。

とかくするうちに、英領北アメリカがこれまで経験したものよりはるかに大規模な移住の奔流を供給する新しい状態が大西洋のかなたで生じた。1815年―ウイーン会議が終了した年、これに伴いヨーロッパの秩序回復が図られた―までは、永い間の戦争が大部分のイギリス人を国内に縛りつけていた。戦時中に他国へ移住することの危険や、フランス革命およびナポレオン戦争の間、人的資源を絶えず必要としたことが海外へのイギリス人の動きを制限してしまっていた。それ以前には、フランスとイギリスの間の戦いを内包していたアメリカ独立戦争が、イギリス人の移住に同様の結果をもたらしていた。しかし1815年以降ヨーロッパでは平和な時代が到来し、1850年以降になってようやく衰微するまで、イギリス人による移住の大波がカナダに押し寄せ始めた。

平和とともに時代の困難さも、人々を混み合ったイギリスから海外のひろびろとした肥沃な原野へと送り出した原因であった。ナポレオン戦争が終わったことは、突然の不景気と深刻な失業を引き起こした。次第によくはなっていったが、イギリスにおける産業構造の変化が非常に早かったことは、貧しい人々に緊張と苦痛をもたらし続け、そのうちの多くのものが新しい生活を求めて自分たちの目を海外に向けた。貧しい者ではなくても、開発を求める未開の土地に見出されるであろうすばらしい機会という物語に魅せられて、人々は植民地を眺めていた。こうして18

15年から1850年までの35年間に、英領北アメリカは止まることのない移住者の流れをイギリスから迎え入れたのである。

1815年から1850年の間にイギリスから英領北アメリカの植民地へやってきた人の数は、それまでにこの植民地の全域に来た人々よりも多かった。植民地の総人口は、1815年の50万未満から1850年の300万近くにまで跳ね上がった。全部で80万人近い移民がやってきたのである。彼らは解雇された兵隊であり、ウェリントンの軍隊で俸給の半分しか支払われなかった将校たちであり、アイルランドの織工や貧民であり、スコットランドの職工や土地から立ち退かされた小作人であり、イングランドの田舎の労働者や工場労働者であった。何人か中産もしくは上流階級の移民もいたが、だいたいにおいて郷紳農民（ジェントルマン）になろうという希望も果たせなかった人々であった。実際問題として移住しようという必要性や強い衝動は、下層の人々の間で最も強かった。多くの人々が彼自身と家族のための旅費としてその最後の資金をかき集めて来ているので、到着した時には一文無しであり、植民地の限られた資源にしがみつこうとした。1840年代末のアイルランド飢饉の移民たちは、この種の人々の中でも多分最悪のものであったろう。到着したとたん、餓えと病気が彼らを束にして移民小屋に運んでいった。しかし新大陸での労働力の絶え間ない需要は、強壮でありさえすれば、一文無しでやってきたとしても生計を稼ぎ出し、この国のやり方を習得し、自分の農場を買うのに十分な貯えを得る機会が与えられたのである。[3]

② 自由渡航時代（1867年—1895年）

第2期の「自由渡航時代」はカナダ連邦が結成された1867年から1895年までの30年弱の期間であり、この間は太平洋岸の中国系移民に対する制限を除けば、[4] カナダへの移民に対して何らの障壁も存在していなかった。しかしながら、1896年にシフトン（Clifford Sifton）が移民担当の大臣に就任することで、「自由渡航時代」は終わりを告げる。

1867年、英領北アメリカ（British North America）の植民地であるノヴァ・スコシア、ニュー・ブランズウィック、連合カナダ（現ケベックとオンタリオ）が集まって連邦を結成しカナダ自治領（Dominion of Canada）となって、イギリス植民地から半ば独立した形態になった。これをコンフェデレーション（Confederation）という。この時点ではニューファンドランドとプリンス・エドワード島は自治領に加わることを拒否していたし、北西準州はまだハドソン湾会社の支配下にあった。さらに、アメリカ合衆国はカナダ西部にその勢力を拡張しようとしており、連邦政府の初代首相になったマクドナルドにとって大きな脅威となっていた。

その後の6年間でプリンス・エドワード島とブリティッシュ・コロンビアが連邦に加わり、ルパーツ・ランド（英国王チャールズ二世の王子ルパートの名にちなんでつけられたハドソン湾会社所有になる西部カナダから北西準州にかけての広大な土地）を連邦政府が買収することによってほぼ現在のカナダの領土面での基礎が出来上がったのである。しかし領土が拡張されても、そこに人間が住みつかなくては連邦国家としてのカナダの将来は揺るぎ無いものとはならない。マ

クドナルド政権にとって、広大なカナダ西部の空白を埋め、隣国アメリカ合衆国からの侵略に備えるためには、大急ぎで国外から大量の移民を呼び寄せ西部へ送り出すことが緊急の課題であった。

カナダ自治領が1867年に誕生した時の人口はおよそ330万人であり、続く数年間に新しい諸州が加わっても、それで増えた人口は数千人に過ぎなかった。オンタリオとケベックはあわせると全人口の約4分の3を占めていた。オンタリオの方が人口が多く、かなり着実に増加し続けたのに対し、ケベックの人口は多数のフランス系カナダ人がアメリカ合衆国東南部の工場へ絶えず流出したため、その増加はごく緩やかであった。またカナダ各地からアメリカ合衆国への移住が生じ、自治領はその後の数年間は期待されていたほど早くは成長しなかった。イギリスからの移住の最高潮はコンフェデレーション以前に過ぎ去っており、英領諸島からの新しい移住の大波は19世紀末まで起こらなかった。その結果、1891年のマクドナルドの死の際までに、カナダの人口はわずか480万人までに増えただけであった。[5]

カナダ西部へ移民を引きつけようとする試みは、カナダ連邦政府の農務省によって熱心に行なわれた。このような努力にもかかわらず、当時の移民政策は失敗に終わった。毎年何千人という外国人がカナダを通過するのだが、そこに止まる者の数は極めてわずかであった。正確な数字はわからないが、1867年から1892年までにカナダにやってきた移民は150万人に近かったと推測されている。[6] ところが、これらの移民の大多数は実はアメリカ合衆国へ流出してしまったのである。この結果、19世紀末までカナダに入ってくる者の数よりはカナダから出ていく者の数の方が多かったのである。

このように西部カナダが外国からの移民たちに定住を決意させるだけの魅力的な存在でなかった理由としては、いくつかの要因が考えられる。第一の要因としては、当時はまだ西部カナダまでの交通手段がなかったことがあげられる。もっとも、大陸横断鉄道が完成した1885年になっても西部カナダに移民の波が押し寄せることはなかったのもまた事実である。第二にカナダの競争相手であったアメリカ合衆国やカナダ以外のイギリス自治領の存在をあげることができる。しかしながら、おそらく最も決定的な要因としては、マニトバや北西準州などカナダ西部の気候の厳しさをあげるべきであろう。プレーリーと呼ばれるこれら大草原における農業は、洪水、早霜、旱魃、バッタの大量発生による虫害などにより穀物が壊滅的な被害に遭うことも珍しくはなかった。[7] 草原州に東欧（ポーランド、ウクライナなど）からの農業移民が大量に定住するようになるまでには、農地の改良や旱魃や虫害に強い新しい品種の小麦の出現などによってこの地域の農業生産性が向上するまで待たなければならなかった。

③　シフトン時代と西部カナダ開拓（1896年—1913年）

第3期「シフトン時代とカナダ開拓」はシフトンが移民担当大臣の地位に就いた1896年から第一次世界大戦勃発の前年である1913年までの期間である。マニトバ州ウィニペグの実業家クリ

フォード・シフトン（Clifford Sifton）は1896年に政権の座に就いた自由党のローリエ（Wilfrid Laurier）内閣の内務大臣（移民担当）に任命される。彼が移民担当の大臣の任にあった1905年までを「シフトン時代」（the Sifton Era）と呼ぶことからもわかるように、彼はカナダ移民政策の歴史において極めて大きな足跡を残している。彼はカナダ西部へ移民をひきつけるためにヨーロッパやアメリカ合衆国やイギリスに移民業務取扱事務所を置き、精力的な宣伝戦を組織的に行ない、大草原への汽車旅行を手配し、選ばれたカナダ人、アメリカ人農民や新聞記者たちが、土地の価値を自分で見ることができるようにした。[8] なかでもとりわけシフトンは、カナダ西部の自然環境の素晴らしさとそこでの農業の将来における発展性を視覚的に表現した小冊子やパンフレット類を無数に印刷・刊行することに力を注いだ。[9]

シフトンはカナダ西部の開拓を進める上で、ヨーロッパからの農業労働者を大量に入植させる計画を持っていたが、それを実施する上で「好ましい」移民を審査・選抜する政策を採った。[10] このようなシフトンの政策は「選択的移民政策」と呼ばれている。ここでの「好ましい」移民とは、カナダ社会（とりわけ英国系を中心とした白人社会）に最も適した集団、すなわち短期間にカナダの社会や文化に適応・同化できると期待される人々であった。反対に「好ましくない」移民集団とは、異なった文化・宗教・言語・習慣を持っているためカナダ社会に同化しにくいと思われる人々である。その選抜はあからさまな人種差別的な基準に基づいたものであった。1910年の政策報告書によれば、政府はアメリカ合衆国、英国、北欧、さらにフランス、ドイツ等の北ヨーロッパや西ヨーロッパの国々からの移民をもっとも「好ましい」ものとして奨励し、東欧、南欧出身の移民は「好ましい」とはみなされていなかった。ましてや東洋系の移民は問題にならなかったのである。[11] シフトンの後継者フランク・オリバー（Frank Oliver）もシフトンの政策を第一次世界大戦まで継承した。[12]

1913年には50万人以上にのぼるヨーロッパ人たちが崩壊寸前のオーストリア・ハンガリー帝国、ウクライナ、中央ヨーロッパから移住してきた。「羊皮の上着を身につけた、がっしりとした百姓」とクリフォード・シフトンが描写したこれらのヨーロッパ人は、たいていウィニペグを通って内陸へ進んで行き、寒さの厳しい殺伐とした草原地方に定着した。彼らは最初の何年かを芝土で作った小屋で過ごし、小麦の収穫で得た現金を貯えて、木造家屋を建てることができるまで待つことが多かった。これらの人々は、人数においては彼らに勝るほどのアメリカ人、オンタリオ人、イギリス諸島からの移住者と一緒になって、西部の小麦地帯を定住地とし、工業製品だけでなく金融業、運輸業の国内市場も拡大し、西部の町における不動産の急騰をもたらした。[13]

東欧出身の移民のなかには、そのあまりに急進的な信仰のゆえにヨーロッパにおける宗教的迫害から逃れて西部カナダへやってきた一団がいた。メノナイト教徒やロシアから移住したデュカボーズ教徒、ロシアからアメリカ経由でやってきたアナバプティスト派のハタライト教徒がそれである。ハタライト教徒の多くはアルバータ州とサスカチュワン州の南部に入植し、デュカボーズ教徒はそれよりも北に位置するサスカチュワン州のヨークトン周辺を選んだ。しかしデュカボーズ教徒は、1905年、彼らの急進的な信仰に対する地域住民の反発や反対運動に直面し、ブリ

ティッシュ・コロンビア州南部の内陸地、クートネイ地域へと移り住む。この地域には今日でもかなりの数のデュカボーズ教徒が住む。[14]

この結果、20世紀の最初の10年間でカナダ西部の草原州（prairie provinces)、すなわちアルバータ、サスカチュワン、マニトバの3州の人口は激増し、1901年から1911年までの草原州全体の人口増加率は220.7%—同時期のカナダの全国平均は34.2%—という驚異的な伸びを示したのである。[15] この影響を受けて現在でもこの地域の住民の民族構成を見ると、ウクライナ系やポーランド系など東ヨーロッパや中央ヨーロッパ出身者の占める比率が他の州に比べて格段に高いことがわかる。

こうして1896年から第一次世界大戦が勃発する1914年までの間に、約250万人の移民がカナダ自治領に押し寄せてきたが、その内訳をみるとヨーロッパが約50万人、アメリカ合衆国が約75万人、そしてイギリス諸島—主にグレート・ブリテンとアイルランド—が約100万人であった。この結果、1901年から1911年の移住のピーク時には、人口は3分の1以上増加して、500万から700万に跳ね上がった。しかし人口の規模の変化よりも民族構成における変化の方がはるかに印象的であった。新移民は大部分が英語系である一方、かなりの数がドイツ、スカンジナヴィア、ロシア、ポーランド、ウクライナ、オーストリア、イタリーなど非英語系の国々からの出身者で占められていた。こうしてカナダはアメリカ合衆国に続いて、初めて人種のるつぼとなったのである。すなわち、イギリス系とフランス系のグループの優位は依然として続いてはいたものの、1867年の連邦結成の時点には取るに足らない比率を占めるに過ぎなかった非英仏系グループが、第一次世界大戦までには総人口の5分の1近くを占めるまでになった。[16]

皮肉なことに、シフトンの期待を裏切って、「好ましい」移民集団はその人口があまり増えず、「好ましくない」とされた東洋系の移民人口は20世紀の最初の10年間に急激な勢いで増え続け、カナダへの移民到着数は1913年には40万人にも達したのである。この急激な東洋系移民の増加の背景には、カナダ大陸横断鉄道（CPR）の建設が当時進行中であり、低賃金でこの重労働に従事する東洋系—とりわけ中国系—の苦力（クーリー）と呼ばれた移民労働力に対する大きな需要が西部カナダに存在したという事情があった。

1900年から1915年までの間に5万人を超える東洋人—日本人、インド人、中国人からなる—がカナダに到着している。これら東洋系移民がカナダの総人口に占める割合はわずか2%に過ぎなかったが、その大多数がブリティッシュ・コロンビア州の太平洋岸に住みついたために、白人社会は東洋人移民に対して神経を尖らせることになったのである。

中国系移民はその外見から来る異様さ—当時の中国は清朝に当たり、カナダに移民してきた中国からの移民男性はその多くが満州族のシンボルである長い弁髪を垂らしていた—もあって中国人に対する排斥が強くなった。[17] それに替わって入ってきたのが日系人移民であった。1900年から1915年の間に16,000人の日系人がカナダに入ってきたが、そのうち83%もがブリティッシュ・コロンビア州に腰を落ち着けている。そのうちの多くはアメリカ合衆国へ再移動したり、日本へ戻ったりしているものの、20世紀の初頭には5,000名に近い日系移民がブリティッシュ・コロン

ビア州に集住するようになった。[18] この結果ブリティッシュ・コロンビアでは東洋人排斥運動が盛り上がりを見せ、1907年にはついにヴァンクーヴァー暴動が起こり、日系人や中国人の商店が襲撃されるという事態に発展している。このような事態を憂慮したカナダ政府と日本政府の間で1908年に紳士協定（ルミュー協約）が締結され、日本からカナダへの移民受入数は年間400名以内に制限されることになった。[19]

④ 第一次世界大戦と復興期（1914年—1929年）

第4期「第一次世界大戦と復興期」は1914年の第一次世界大戦の勃発に始まり、1929年に始まった大恐慌までのおよそ15年間である。第一次世界大戦においてカナダは多大の犠牲を払った。しかしそれはカナダが世界政治の中で、アメリカ合衆国やイギリスといった強大国との対等の地歩を占めるうえで求められた犠牲であった。カナダの大戦への貢献は軍事力に限らず、軍需物資、食料の供給という点で、カナダの存在はドイツと戦う連合軍側にとって不可欠であった。こうして対外面においては、第一次大戦で外交上の自治を一段と促進したカナダではあったが、国内では徴兵問題を巡って、再びイギリス系カナダとフランス系カナダの対立が顕在化するという厳しい代償を支払わなくてはならなかった。[20]

第一次大戦中、ヨーロッパからカナダへの移民は激減するが、その主たる原因は、移民を輸送する船舶の航行がきわめて高い費用を要するものとなっただけでなく、敵国軍の攻撃にさらされる危険を伴うものとなったために、ヨーロッパ大陸やイギリスからカナダへの移住が極めて困難になったためと、それまで移民を送り出していたヨーロッパの諸国が、自国内の軍需産業や軍隊で多くの人手を必要とするようになったためである。かくしてイギリスからカナダへの移民数は、1913年には142,400人であったのが、翌年にはその70%にまで減少してしまい、その後は年平均7,500人という数字が戦争の終結まで続いたのである。[21]

第一次大戦後、大恐慌に見舞われるまでカナダにはおおむね好景気が続いた。天然資源に恵まれた北部、その恩恵を被ることのできた中央カナダ（オンタリオ、ケベック）は恵まれていた。しかし好況の恩恵に浴さなかった沿海地方の諸州（maritime provinces）は1920年代にこの地方の利益を守る運動を起こした。このセクショナリズムは西部カナダにも波及し、ここでは農民たちが自分たちの利益を守るために政治的運動を展開することになる。

第一次大戦中に激減したカナダへの移民は、1923年から始まる経済的繁栄の中で再び増え始め、1929年には168,000人という一つのピークに達した。[22] 西部の農地はまだまだ発展の余地があり、アルバータとサスカチュワンは着実な成長を遂げた。

⑤ 大恐慌期（1930年—1937年）

1929年にアメリカ合衆国から始まった経済恐慌の波はカナダにも押し寄せてきた。1930年まで

に、カナダのすべての地域が不況の悪循環のなかになだれこんでいった。世界貿易が落ち込み、失業が増加するにつれ、人々は購買力がなくなり、商業はドンドンと沈下した。カナダは現在の人口だけでも難儀していた。東部の工業地帯はひどい打撃を受けたが、ここでは地下資源に富む楯状地（カナディアン・シールド）の金鉱の開発が進んで東部への打撃を緩和した。極西部もまた太平洋貿易と漁業の衰退により影響されたが、ロッキー山中の鉱業がふたたびブリティッシュ・コロンビアを助けた。もっとも大きな影響を受けたのは、一つの産品（ステープル）—小麦—に大きく依存していた西部の草原州であった。世界の小麦価格の崩壊は草原州を手ひどく打ちのめし、大草原に便宜を与えていた鉄道の収入を減らして、鉄道の債務というカナダにとって費用のかかる問題を増やした。その上、西部を襲った旱魃が小麦収穫高を前代未聞の低記録にとどめ、農民が受け取ることを期待したであろうわずかな所得までを奪い取ることが多かった。歳入が減少したのに失業救済額が高騰した草原諸州の政府は破産に直面していた。[23]

英領北アメリカ法の規定によれば、福祉的援助は主として州政府および地方自治体がその責任を負うことになる。しかしながらこの時期の失業者の数は州政府の財政能力をはるかに超えたレベルにまで達した。たとえばトロントでは、失業救済のための予算が1929年から1933年の間に30倍にも高騰している。[24]

かくして、最終的な手段として、失業中の移民を国外退去させることで財政負担を少しでも軽減しようとする政策がとられることになった。移民政策に関して1930年代をそれ以前もしくはそれ以後の時代から区別する独自の現象としては、強制送還者の数がこの時期に異常に増加したことをあげることができる。たとえば、1902年から1928年の間に平均して年間およそ1,000名の人々が強制送還されている。これと対照的に、1931年には7,000名以上の移民がカナダから国外へ退去させられ、1930年から1935年の間に平均して5,700名の人々が毎年強制送還されている。[25]

移民政策との関わりで大恐慌期を特徴づけるもう一つの現象は、政府による共産主義者および過激な組合活動家（とみなされた者）の国外退去措置が異常ともいえる熱気を帯びてなされたことである。もっとも、政治的な信条や活動のゆえにカナダから国外退去させられた移民の正確な数は知ることはできない。なぜなら、政府は政治的な理由で強制送還された者たちについては、「政治犯」以外のカテゴリー—たとえば「犯罪者」もしくは「生活保護者」—として扱うために、正確な実態は隠されており、統計的数字には現れてこないからである。[26]

かくして、1930年から1937年までの大恐慌の期間は、移民受入数の激減という結果を招いた。1931年に88,000人だったカナダの移民受入数が翌年には26,000人弱にまで落ち込んでいる。その後毎年移民受入数は減少し続け、1936年にはついに11,000人まで落ち込み、底を突いた。

⑥ 景気回復と第二次世界大戦（1938年-1945年）

第6期「景気回復と第二次世界大戦」はカナダの景気が回復に向かい始めた1938年から第二次世界大戦が終了する1945年までの時期である。1937年におよそ12,000名の人々がカナダに移民し

てきている。その後その数は年々徐々に増え続け、1939年には17,000名に達している。しかしながら、第一次世界大戦直前の1913年にヨーロッパからカナダへの移民が38万人を越えたことを考慮すると、この数字は意外に少ないことに気がつく。この主な原因としてはヨーロッパ大陸での戦争が拡大し、ヨーロッパの多くの国々がナチス・ドイツの軍隊に侵略されたことにより、旅行が極めて危険な状態にあったために、ヨーロッパ諸国に置かれていたカナダの移民業務取扱センターが閉鎖されたことがあげられるだろう。[27]

1939年9月3日にイギリスとフランスがドイツに宣戦布告し、その一週間後にカナダ連邦議会は宣戦布告を決議した。1940年には連邦議会下院で国家総動員法が可決通過したことによりカナダは戦時体制へ完全に移行した。

戦前、戦中、それに戦後の短い期間においてカナダの移民政策の基本的な法となっていたのは1931年3月31日の枢密院令（P.C. 695）である。この法令によると、移民としてカナダに入国が許可される者は、次のいずれかのカテゴリーに属していなければならなかった。[28]

(1) 英国国民（British subjects）

(2) アメリカ合衆国市民（Citizens of the United States of America）

(3) 法によって認められたカナダ住民（residents）の妻、婚約者、および18歳未満の子供

(4) カナダで農業を営むのに十分な財力を有する農業経営者

この法令において明らかなことは、同じヨーロッパ人でも英国国民でない場合には極度に不利な立場に置かれていたということである。これはカナダであるから当然優遇されるべきと思われるフランス人についても同じことが言える。英国国民、合衆国国民の指名リストにフランス国民が加えられたのは、実に1949年になってからのことであった（P. C. 2743）。[29]

また「敵国出身者」あるいは「敵国の言語を話す者」に対する移民禁止により、ドイツからの移民も、大戦間の一時期を除くと極度に制限されていた。またこの法令には言及されていないが、アジア系の移民は他のヨーロッパ人よりもさらに不利な立場に置かれていた。たとえば中国系の者については、1923年の中国人移民排斥法（Chinese Immigration Act）によって、すでに2,500ドル以上の投資をして3年以上の貿易業の実績のある者を除いては、国籍、宗教を問わずいかなる中国系の者もカナダへの入国が禁止されていた。[30] この結果中国系の移民はほとんど完全に停止した。また上記第3項の保証人となることのできる者は、アジア系の者については、1930年9月16日の枢密院令（P. C. 2115）によると、たんなる「住民（resident）」ではなくて「カナダ在住のカナダ市民（citizen）」である必要があった。

カナダ太平洋岸のブリティッシュ・コロンビア州には早くから日系人が定住し、ヴァンクーヴァーのパウエル街には日本人町も形成されていた。このように日系人だけの閉鎖的なエスニック・コミュニティを形成し、周囲のホスト社会（イギリス系白人からなる主流社会）に同化しようとせず極めて異質な文化・宗教・慣習・生活習慣を保持したことが、日系人に対する人種的偏見や差別感情を醸成し、さらにこれを助長・扇動する反日的な政治家の動きも加わって、ブリティッシュ・コロンビア州における日系人排斥の風潮が強まっていった。

1931年9月、日本軍は南満州鉄道爆破事件を起こし、中国大陸侵略の第一歩を踏み出した。いわゆる「満州事変」の勃発である。1932年3月、日本軍は「満州」(現中国東北地方)のほぼ全域を手中に収め、傀儡政権「満州国」の建国を宣言した。その後の日本軍の一連の突出した軍事行動は、ブリティッシュ・コロンビア州内の排日感情の高まりに勢いをつける結果となったことは言うまでもない。

1941年12月7日(現地時間)の日本軍によるハワイ真珠湾奇襲攻撃に端を発した太平洋戦争の勃発に伴い、カナダ連邦政府は、ブリティッシュ・コロンビア州の太平洋岸に定住していたすべての日系人を国籍の有無に関わらず「敵性外国人」と規定し、彼らの市民権を大幅に制限する措置に出た。さらに国家の安全を脅かすとみなされた38人の日系人指導者がカナダ連邦警察(RCMP)によって逮捕されている。1942年2月24日、キング首相は枢密院令(P. C. 1486)を発令し、これによってすべての日系人は財産を没収され「防衛地域」から立ち退くことになる。その多くはロッキー山脈内の収容所に向かったが、道路建設の現場や、アルバータとマニトバのビート(砂糖大根)栽培農場へ向かった者たちもいた。[31]

---

[1] Ninette Kelly and Michael Trebilcock, *The Making of the Mosaic: A History of Canadian Immigration Policy*, University of Toronto Press, 1998, pp.28-29.

[2] *Ibid.*, p.37.

[3] J. M. S. ケアレス著/清水博・大原祐子訳『カナダの歴史—大地・民族・国家—』山川出版社、1978年、156-158頁。

[4] 1945年まで、カナダの移民政策は、中国人、ユダヤ人、東インド人、東洋人といった特定の人種的背景をもつ人々を排除してきた。とりわけ中国人移民に対しては「人頭税」を課すことで経済的に貧困な移民を排除する方法を採用した。人頭税の額は1884年では1人当たり50ドルであったが、1903年には500ドルに引き上げられた。この課税の目的は中国系の移民をすべて停止させるというよりは、労働者と貧困者を排除することにあった。それというのも、公務員、商人、旅行者、学者、学生などの「望ましい」中国人は人頭税を免除され、カナダへの入国を許可されたのである。Edgar Wickberg, ed., *From China to Canada: A History of the Chinese Communities in Canada*, Ministry of Supply and Services in Canada, 1982, pp.82-83.

[5] J. M. S. ケアレス著、前掲書、284-285頁。

[6] Department of Citizenship and Immigration, Immigration and Demographic Policy Group, *Immigration Statistics* (Ottawa: Queen's Printer,1991).

[7] Ninette Kelly and Michael Trebilcock, *op. cit.*, p.63.

[8] J. M. S. ケアレス著、前掲書、318頁。

[9] R. Douglas Francis, *Images of the West: Changing Perception of the Prairies, 1690-1960*, Western Producer Prairie Books, 1989, pp.108-109.

[10] Ninette Kelly and Michael Trebilcock, *op. cit.*, pp.117-121.

[11] カナダにおける東洋系の移民(中国系、日系、インド系)に対する排斥や差別については次の文献が参考になる。Eleanor Laquian, Aprodicio Laquian and Terry McGee(eds.), *The Silent Debate: Asian Immigration and Racism in Canada*, The University of British Columbia, 1998.

[12] シフトンの移民政策の分析については次の文献を参照されたい。D. J. Hall, "Clifford Sifton: Immigration

and Settlement Policy 1896-1905," in R. Douglas Francis and Howard Palmer(eds.), *The Prairie West: Historical Readings*, Pica Pica Press, 1985, pp.281-308.

[13] ケネス・マクノート著／馬場伸也監訳『カナダの歴史』ミネルバ書房、1977年、213頁。

[14] 現在アルバータにはハッテライト教徒とメノナイト教徒のコロニーが多数存在しており、しかもその数は増え続けている。これら宗派が「アナバプティスト」（再洗礼主義者）と呼ばれるわけは、宗教改革の時代に幼児洗礼を否定し、成人洗礼を実行したためであり、聖書の「使徒行伝」にある「愛の共産体」にならい財産の共有を主張し実践している。とりわけハッテライト教徒は徹底した絶対平和主義を信奉し、自分たちの子息を軍隊に送り込まないし、国債は軍事費として使われるからという理由で国債を買わない。しかもコロニーという閉鎖的なエスニック・コミュニティを形成し、自給自足に近い生活を送っている。このように宗教上の信条や生活習慣を堅く保持して、ホスト社会に同化しようとしないグループが一般社会から歓迎されるわけがない。彼らは産児制限をしないから驚異的な勢いで人口増加を遂げ、人口過密状態になると、新しいコロニーを建設するために、既存コロニーの住民の約半数が土地を求めて移動する。ダグラス・フランシス著「プレーリー西部と新移民」（ダグラス・フランシス、木村和男編著『カナダの地域と民族』同文館、1993年、169-170頁）。Victor Peters, *All Things Common: The Hutterian Way of Life*, University of Minnesota Press, 1965. William Janzen, *Limmits on Liberty: The Experience of Mennonite, Hutterite, and Doukhobor Communities in Canada*, University of Toronto Press, 1990.

[15] W. Peter Ward, "Population Growth in Western Canada, 1901-71," in *The Developing West: Essays on Canadian History in Honor of Lewis H. Thomas*, ed. by John E. Foster, The University of Alberta Press, 1983, pp.157-177.

[16] J. M. S. ケアレス著、前掲書、319頁。

[17] 次の文献は19世紀にアメリカに大量に移住してきた中国人移民の「異様な」風俗について当時の新聞や雑誌の風刺漫画がどのように描いていたかを紹介していて興味深い。Philip P. Choy, Lorraine Dong, and Marlon K. Hom, (eds.), *Coming Man: 19th Century American Perceptions of the Chinese*, The University of Washington Press, 1995.

[18] Ninette Kelly and Michael Trebilcock, *op. cit.*, p.143.

[19] 日本からカナダへの移民の歴史を扱った文献は多いが、次にその中の主なものをあげる。新保満著『石をもて追わるるごとく—日系カナダ人社会史—』御茶の水書房、1975年（新版、1996年）。新保満著『日本の移民—日系カナダ人に見られた排斥と適応—』評論社、1977年。吉田忠雄著『カナダ日系移民の軌跡』人間の科学社、1993年。飯野正子著『日系カナダ人の歴史』東京大学出版会、1997年。佐々木敏二著『日本人カナダ移民史』不二出版、1999年。

[20] J. M. S. ケアレス著、前掲書、342-358頁。

[21] Ninette Kelly and Michael Trebilcock, *op. cit.*, p.167.

[22] *Ibid.*, p.165.

[23] J. M. S. ケアレス著、前掲書、381-382頁。

[24] Ninette Kelly and Michael Trebilcock, *op. cit.*, p.229.

[25] *Ibid.*, p.227.

[26] *Ibid.*, pp.234-235.

[27] *Ibid.*, p.251.

[28] Freda Hawkins, *Canada and Immigration: Public Policy and Public Concern*, McGill-Queen's University Press, 1988, pp.89-90.

[29] Ninette Kelly and Michael Trebilcock, *op. cit.*, p.321.

[30] 中国人移民排斥法が廃止されたのは1947年であった。Ninette Kelly and Michael Trebilcock, *op. cit.*, p.321.

[31] Ann Gomer Sunahara, *The Politics of Racism: The Uprooting of Japanese Canadians during the Second World War*, James Lorimer & Company, 1981. 村井忠政著『日系カナダ人女性の生活史』明石書

店、2000年、巻末論文「南アルバータの日系人社会」(321—322頁)。